

地理学研究者として思うこと



齋藤 元子

私が専門とする地理学は、大きく分けて自然地理学と人文地理学の二分野に分けられますが、自然地理学、なかでも気候を扱う分野の研究者

の間に、ヘボンはかなり知られた存在です。というのは、ヘボンが日本で長期間にわたって気象観測を行っていたからです。

明治学院が以前に発行した小冊子『明治学院日本はじめて物語』でも、このことに触れています。お読みになった方も多いと思いますが、その一部を引用すると「米国気象学会の会員でもあったヘボン博士は、神奈川に到着し、1859（安政6）年11月1日から10年以上の間、日の出時と午後2時の気温を測り、雨量を記録し、晴・曇・雨などの日数、月別最高・最低気温や平均気温を出して観測表を作成」とあります。

私の知る女性地理学者の一人は、ヘボンの観測記録（彼女はオランダの大学図書館で見たと確か言っていました）や少し前の時代の長崎出島におけるオランダ商館員による気象観測と近年の気象データを比較し、地球温暖化の影響が日本にどの程度及んでいるかを研究しています。つまり、ヘボンは今日地球規模の問題となっている温暖化を食い止めるための研究に一役買っているわけです。

実は、私の学位論文を指導してくれた大学院時代の恩師も、気象庁出身の地理学者です。昨年、私がキリスト教研究所の客員研究員としてお世話になることが決まった際、その報告に行くと「まだ地理学者が知らないヘボンの史料が見つかるとおもしろいですね」と言われました。残念ながら、私の努力不足もあって、未だ新たな史料の発見はありませんが、来年3月の任期終了までに、地理学とヘボンを結ぶような報告が何かできればと思っています。

もう一人、地理学と縁の深いクリスチャンがいます。それは内村鑑三です。こちらは人文地理学、とりわけ、地理学史や地理教育の研究者の間では、頻繁に名前が挙がります。その理由は、内村の著書『地人論』（最初のタイトルは『地

理学考』が地理学書とみなされているからです。

『地人論』は、プリンストン大学教授の地理学者アーノルド・ギョーの著書 *The Earth and Man* をもとに書かれました。ギョーはアメリカにペスタロッチ主義地理教育を広めた人物として有名で、彼の作成した地理教科書は全米で使用されました。

近年では、内村の『地人論』を地理教育論のテキストとして読み直そうという動きがあり、

「社会科地理教育論の先駆者内村鑑三」・「内村鑑三の地理思想に関する地理教育論的考察」といった論文も発表されています。地理学者による『地人論』研究は、かなりの蓄積があると言えるでしょう。しかしながら、そこでは、クリスチャンとしての内村鑑三の姿は深くは追求されていません。

他方、内村鑑三研究においては、内村と地理学の関係はあまり注目されていないようです。内村研究者のなかには、内村が地理学者から注目されていると聞くと不思議そうな顔をする人もいますし、ギョーを知らない人もいました。

私のなかでは、地理学の世界で耳にする内村鑑三とキリスト教の世界で耳にする内村鑑三が、あたかも別人のように存在しています。クリスチャン内村鑑三が、地理学者アーノルド・ギョーとどのような交流を持ち、いかに影響を受けて、『地人論』を書くに至ったかに関心のある私は、内村研究の現状にある種の物足りなさを感じると同時に、地理学と内村研究をクロスオーバーさせれば、新たな内村鑑三論が提示できるのではとも感じています。この試みは、現在の私の力では、全く歯が立たないことですが、いつかはトライしてみたいと思っています。

(さいとう もとこ

客員研究員・本学非常勤講師)